英文学にデコピン

阿部公彦

4　ブレイクの喜び具合

私が大学生一年の頃は、まだ英語の必修授業でも文学作品を読むことが多かった。上島建吉先生の「ロマン派入門」もその一つ。最初に読んだのはウィリアム・ブレイクの'Infant Joy'だ。ごく短い作品である。'I have no name/ I am but two days old.— / What shall I call thee?/ I happy am/ Joy is my name,—/ Sweet joy befall thee!'　これが前半。さて、その先は？　きっと何かが起きるよね？　落とし前がつくよね？と思って読むと。…Sweet joy I call thee; / Thou dost smile. / I sing the while/ Sweet joy befall thee.'　これでおしまい。

「え？　これでおしまい？」と言いたくなる。後半でも新しい展開はなく、前半の対話に対する祝福だけがある。一種のコーラスだ。もちろん『無垢の歌』(*Songs of Innocence*) という詩集全体の流れの中にある作品だから、これですべてではないし、詩とセットの挿絵も大事だ。でも、それにしても「これだけ？」感は残る。

しかし、この中途半端さが、私にはむしろ魅力的に思えた。わかりやすいオチがない、終わらない。どことなく不安定。しかも、語られているのは「喜び」なのだ。実は私は、上島先生の「何か意見があったら書いて出しなさい」という言葉を真に受け、'I happy am'という箇所について、汚い字で長い「思弁」を書き連ねて先生の研究室にお持ちしたのである。そんなことをする空気の読めない学生は他にはいなかった。でも、上島先生は授業中、私の汚い字の「思弁」を丁寧にとりあげ、御自身の考えをまじえて展開してくださった。ぐちゃぐちゃした思いつきは、上島先生の手にかかって実存主義とか、存在論という話に昇華される――手品のように。その後、時は流れ、私のところにも汚い字で長々と「思弁」を書き連ねる空気の読めなそうな学生がたまにくるが、何だか親近感が湧いて冷たくする気にはなれないのである。

それにしても、生後二日の子どもが「嬉しいねえ。オレの名は“喜び”だよ♪」なんて語るのは変だ。ブレイク自身、ロマン派の中でもとりわけ「空気が読めない系」だったようだが、この微妙に神経にさわる喜びの横溢はやっぱり希有なものだ。

(英文学者)